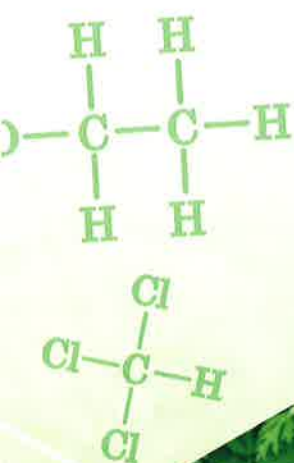


2020年度企画展

麻醉薬のあゆみと 華岡青洲

HANAOKA
SEISHU



2020年5月12日[火] — 2021年3月31日[水]

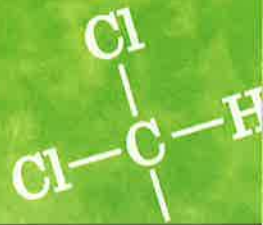
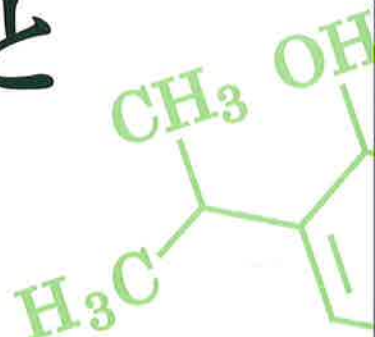
新型コロナウイルスの感染防止のため、開催日を変更する場合があります。
ご来館に際しては、開催日をご確認くださいませようよろしくお願いいたします。

- 開催会場 内藤記念くすり博物館
- 開館時間 9:00~16:30 ●休館日 月曜日、年末年始 ●入場料 無料
- ※博物館・薬草園ともに最終入場時間は16:00

主催 内藤記念くすり博物館



公益財団法人
内藤記念科学振興財団



麻酔薬のあゆみと華岡青洲

麻酔薬は外科治療の選択の幅を大幅に広げました。麻酔法がなかった時代には、外科、整形外科、眼科、歯科、産婦人科などの外科的手術は、耐えられない痛みが伴いました。また、昔は消毒法という考え方も不十分で、衛生的でない設備と環境のもとでの手術では、感染のため命を落とす危険も高かったのです。200年前には、手術を受けた患者の50%は手術後に死亡したという記録があります。

古代から痛みを感じずに手術できる薬はないかと探し求められてきましたが、言い伝えが多く、さらに信頼すべき正確な記録が残されておりません。全身麻酔薬を用いた手術が行われた記録がきちんとした形で残されたのは、19世紀初めの日本のことでした。

文化元年(1804)、紀州(現在の和歌山県)の華岡青洲^{はな おか せいしゅう}は、いつ、どこで、どのような全身麻酔薬を用いて、どのような手順で手術を行い、どのような結果になったかを記録しました。正確な記録が残されている限りではこれが全身麻酔薬を用いた手術の世界で最初の成功例となりました。その42年後、アメリカでモートンがエーテルを用いた麻酔法を公開実験して、それ以後、吸入麻酔薬を用いる麻酔法が世界的に普及していきました。

全身麻酔法は、手術を受ける患者にとっては意識を失っている状態のため苦痛や不安を感じず、痛みで思わず体を動かしたり、筋肉に力が入ることもなく、自律神経の反射が抑えられて血圧や心拍数の上昇が起きないという利点があります。さらに消毒法の開発によって手術後の感染も少なくなり、術者は安心して手術することが可能となりました。

今回の企画展では、洋の東西の麻酔法の歴史をたどり、とくに日本の華岡青洲の全身麻酔薬・麻酔散^{まふつきん}(後に麻沸湯とも呼ばれた)はどのような経緯で開発され、どのような手術に用いられた全身麻酔薬であったか、また近現代の麻酔法(全身麻酔法、局所麻酔法)がどのように開発されたか、現在どのような麻酔法、麻酔薬が用いられているのかを紹介いたします。超高齢社会になるにつれ、誰もが手術を受ける機会が増えていますので、ぜひこの機会に麻酔法について知識を深めていただければ幸いです。



華岡流手術道具

江戸時代
華岡塾で学んだ備中の塾生・山本初平が使用した手術道具である。



麻酔用エーテル

オーリンマチソン会社スクイブディヴィジョン
三楽オーシャン製造
スクイブ社の麻酔薬。缶入りで中の液体を気化器で気化させて使用。



開放点滴用麻酔用マスク

麻酔用マスクの金具にガーゼをかぶせ、麻酔薬を滴下して吸入させる。



内藤記念くすり博物館

ウェブサイト「くすりの博物館」 <http://www.eisai.co.jp/museum>

〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1
tel. 0586-89-2101 / fax. 0586-89-2197

交通のご案内

岐阜方面

岐阜バス「川島松倉」行 → 「川島中学校前」下車 徒歩1.5km/20分

名古屋方面

JR東海道本線「尾張一宮駅」下車 } 名鉄バス「川島」行
名鉄名古屋本線「名鉄一宮駅」下車 } 「川島口」下車 徒歩1.5km/20分

車で
お越しの方

東海北陸自動車道「岐阜各務原I.C.」より 9km/15分
東海北陸自動車道「一宮木曾川I.C.」より 9km/15分
名神高速道路「一宮I.C.」より 12km/35分

